

# 第二竊本

泉鏡花

青空文庫



---

—

雪の夜路の、人影もない真白な中を、矢来の奥の男世帯へ出先から帰つた目に、狭い二階の六畳敷、机の傍なる置炬燵に、肩まで入つて待つていたのが、するりと起直つた。逢いに来た婦の一重々々、燃立つような長襦袢ばかりだつた姿は、思い懸けずもまた類なく美しいものであつた。

膚を蔽うに紅のみで、人の家に澄まし振。長年連添つて、気心も、羽織も、帶も打解けたものにだつてちよつとあるまい。

世間も構わず傍若無人、と思わねばならないのに、俊吉は別に怪まなかつた。それは、懐しい、恋しい情が昂つて、路々の雪礫に目が眩んだ次第ではない。

——逢いに来た——と報知を聞いて、同じ牛込、北町の友達の家から、番傘を傾け傾け、雪を凌いで帰る途中も、その婦を思うと、鎖した町家の隙間洩る、仄な燈火よりも颯と濃い緋の色を、酒井の屋敷の森越に、ちらちらと浮いつ沈みつ、幻のように視たのであるから。

当夜は、北町の友達のその座敷に、五人ばかりの知己ちかづきが集つて、袋廻しの運座があつた。雪を當込んだ催ではなかつたけれども、黄昏たそがれが白くなつて、さて小留こやみもなく降ふりし頻ひんる。戸外の寂寞さみしいほど燈ともしびの興わは湧わいて、血氣の連中、借錢ばかりにして女房なし、河豚ふぐも鉄砲てつぱうも、持つて來い。……勢いきおいはさりながら、もの凄すごいくらい庭の雨戸を圧おさして、ばさばさ鉢前はちまへの南天まで押寄せた敵てきに對たいして、驚破すわや、蒐かかれと、木戸を開いて切つて出づべき矢種やはりおはないので、逸雄はやりおの面々歯はがみ噛かみをしながら、ひたすら籠ろうじょう城じょうの軍議一決。そのつもりで、——千破矢ちはやの雨滴あまだれという用意は無い——水の手の爛德利かんどくりも宵からは傾けず。追加の雪の題だいが、一つ増しただけ互選ふくせんのおくれた初夜過ぎに、はじめて約束の酒となつた。が、筆のついでに、座中の各自てんでが、好すき、惡きら、その季節、花の名、声、人、鳥、虫などを書きしるして、揃つた処で、ひとつなにがし何某なにがし……好きなものは、美人。

「遠慮は要らないよ。」

悪むものは毛虫、と高らかに讀上げよう、といふ事になる。

箇条の中に、最好、としたのがあり。

「この最好といふのは。」

「当人が何より、いい事、嬉しい事、好な事を引くるめてちよつと金麩羅きんぶらにして頬張るん

だ。」

その標目みだしの下へ、何よりも先に＝＝待人きた来る＝＝と……姓を吉岡と云う俊吉が書込んだ時であつた。

襖ふすまをすうと開けて、当家の女中が、

「吉岡さん、お宅からお使つかいでござります。」

「内から……」

「へい、女中さんがお見えなさいました。」

「何てつて？」

「ちよつと、お顔をツて、お玄関にお待ちでございます。」

「何だろう。」と俊吉はフトものを深く考えさせられたのである。

お互に用の有りそうな連中は、大概この座に居合わす。出先へこうした急使の覚えはいきさかがないので、急な病氣、と老人としよりを持つ胸に応えた。

「敵の間諜まわしものじやないか。」と座の右に居て、猪口ちよくを持ちながら、膝の上で、箇条を拾つていた当家の主人が、ト俯向うつむいたままで云つた。

「まさか。」

とみまわすと、ずらりと車座が残らず顔を見た時、燈の色が艶と白く、雪が降込んだように俊吉の目に映つた。

## 二

「ちよつと、失礼する。」

で、引返して行く女中のあとへついて、出しなに、真中の襖を閉める、と降積る雪の夜は、一重の隔も音が沈んで、酒の座は摺退いたように、ずつと遠くなる……風の寒い、冷い縁側を、するする通つて、来駢れた家で戸惑いもせず、暗がりの座敷を一間、壁際を抜けると、次が玄関。

取次いだ女中は、もう台所へ出て、鍋を上の湯気の影。

そこから彗星のような燈の末が、半ば開けかけた襖越、仄に玄関の置へさす、と見ると、沓脱の三和土を間に、暗い格子戸にぴたりと附着いて、横向きに立つていたのは、俊吉の世帯に年増の女中で。

二月ばかり給金の借りのあるのが、同じく三月ほど滞つた、差配で借りた屋号の黒い提

灯ちんを袖に引着けて待設ける。が、この提灯を貸したほどなら、夜中に店立たなだてをくわせも  
しまい。

「おい、……何だ、何だ。」と框かまちまで。

「あ、旦那様。」

と小腰かがを屈めたが、向直つて、

「ちよつと、どうぞ。」と沈めて云う。

余り要ありそうなのに、急き心に声が苛立いらだつて、

「入れよ、こつちへ。」

「傘も何も、あの、雪で一杯でござりますから。皆様のお穿はきものが、」

成程、暴風雨あらしの舟が遁にげこ込んださながらの下駄の並び方。雪が落ちると台なしという遠慮  
であろう。

「それに、……あの、ちよつとどうぞ。」

「何だよ。」とまだ強く言いながら、俊吉は、台所から燈あかりの透く、その正面の襖を閉めた。  
真暗まづくらになる土間の其方に、雪の袖なる提灯一つ、夜を遙な思はるかおもいがする。  
劳ねぎらしい心で、

「そんなに、降るのか。」といいいい土間へ。

「もう、貴方あなた、足駄あしだが沈みますほどでござります。」

聞きも果てずに格子に着いて、

「何だ。」

「お客様でございまして。」と少し顔を退けながら、せいせい云う……道を急いだ呼吸いきづかい、提灯の灯の額際が、汗ばむばかり、てらてらとして赤い。

「誰だ。」

「あの、宮本様とおっしゃいます。」

「宮本……どんな男だ。」

時に、傘からかさを横にはずす、とバサリという、片手に提灯を持直すと、雪ゆきがちらちらと軒を潜くぐつた。

「いいえ、御婦人の方でいらっしゃいます。」

「おんな  
「婦おんなが？」

「はい。」

「婦だ……待つてゐるのか。」

「ええ、是非お目にかかりとうござりますつて。」

「はてな、……」

とのみで、俊吉はちよつと黙つた。

女中は、その太つた躯を揉みこなすように、も一つ腰を屈めながら、

「それに、あの、お出先へお迎いに行くのなら、御朋輩の方に、御自分の事をお知らせ申さないよう、内証ないしよでと、くれぐれも、お詫ことづけでございましたものですから。」

「変だな、おかしいな、どこのものだか言つたかい。」

「ええ、御遠方。」

「遠い処か。」

「深川からとおつしやいました。」

「ああ、襟巻なんか取らんでも可い。いい。……お帰り。」

女中はポカンとして膨れた手袋の手を、提灯の柄ごと唇へ当てて、  
「どういたしましよう。」

「……可し、直ぐ帰る。」

座敷に引返ひつかえそうとして、かたりと土間の下駄を踏んだが、ちよつと留まつて、

「どんな風采をしている。」と声を密めると。  
 「あの真紅なお襦袢で、お跣足で。」

## 三

「第一、それが目に着いたんだ、夜だし、……雪が白いから。」

俊吉は、外套も無しに、番傘で、帰途を急ぐ中に、雪で足許も辿々しいに附けても、心も空も真白に跣足というのが身に染みる。

——しかし可訝しい、いや可訝しくはない、けれども妙だ、——あの時、そうだ、久しぶりに逢つて、その逢つたのが、その晩ぎり……またわかれになつた。——しかもあるの時、思いがけない、うつかりした仕損いで、あの、お染の、あの体に、胸から膝へ血を浴びせるようなことをした。——

みまわせば、我が袖も、他の垣根も雪である。

——去年の夏、たしか八月の末と思う、——

その事のあつた時、お染は白地明石に藍で子持縞の羅を着ていたから、場所と云い、

境遇も、年増の身で、小さな芸妓屋に丸抱えという、可哀な流にしがらみを掛けた袖も、花に、もみじに、霜にさえその時々の色を染める。九月と云えば、暗いのも、明いのも、そこいら、……御神燈並に、紹なり、お召なり 单衣に衣更える筈。……しよぼしよぼ雨で涼しかつたが葉月の声を聞く前だつた。それに、浅草へ出勤て、お染はまだ間もなかつた頃で、どこにも馴染は無いらしく、連立つて行く先を、内証で、抱主の薦家の女房とひそひそと囁いて、その指図に任せた始末。

披露の日は、目も眩むように暑かつたと云つた。

主人が主人で、出先に余り数はなし、母衣を掛けて護謨輪を軋らせるほど、光つた御茶屋には得意もないでの、洋傘をさして、抱主がついて、細かく、せつせと近所の待合小料理屋を刻んで廻つた。

「かさかさして、えんえんえん、という形なの、泣かないばかりですわ。私もう、嬰児に生れかわった気になつたんですけれど、情ないッてなかつたわ。

その洋傘だつて、お前さん、新規な涼しいんじやないでしよう。旅で田舎を持ち歩行いた、黄色い汚点だらけなんじやありませんか。

そしてどうです、長襦袢たら、まあ、やつぱりこれですもの。」

と包ましやかに、薄藤色の半襟を、面瘦せた、が、色の白い頬で压えて云う。

その時、小雨の夜の路地裏の待合で、述懐しつつ、恥らつたのが、夕顔の面影ならず、膚を包んだ紅くれないであつた。

「……この土地じや、これでないと不可いけないんだつて、主人が是非と云いますもの、出の衣裳だから仕方がない。

それで、白足袋でお練ねりでしよう。もう五にもなつて真白まっしろでしよう、顔はむらになる……奥山相当で、煤けた行燈あんどんの影へ横向きに手を支いて、肩で挨拶あいさつをして出るんならいいけれど、それだつて凄いわね。

真昼間まっぴるまでしよう、遣切れたもんじやありやしない。

冷汗だわ、お前さん、かんかん炎天に照附けられるのと一所で、洋傘洋かさを持った手が辺りんですもの、掌から、」

一二の腕が衝つと白く、且つ白麻の手巾ハンケチで、ト肩をおさえて、熟じつと見た瞼の白露。

——俊吉は、雪の屋敷町の中ほどで、ただ一人。……肩袖じらじらをはたはたと払つた。……払えば、ちらちらと散る、が、夜目にも消えはせず、なお白々おもかげと併立つ。

## 四

「この、お前さん手巾ハシケチでさ、洋傘の柄を、しつかりと握つて歩行あるきましたんですよ。

あとへ跟ついて来る女房おかみさんの風俗ふうッたら、御覽なさいなね。人の事を云えた義理じやな  
いけれど、私よりか塗立つて、しょろしょろ裾すそなが長か何かで、鬢びんをべつたりと出して、黒  
い目を光らかして、おまけに腕まくりで、まるで、売うりますの口上言いだわね。

察して下さいな。」

と遺瀬やるせなげに、眉をせめて俯目ふしめになつたと思うと、まだその上に——氣障きざじやありませ  
んか、駆かけだ出しの女形がハイカラ娘の演すると洋傘かさを持った風采なりを自ら嘲あざわらつた、そ  
の手巾ハシケチを顔に当てて、水髪しのぶしづくや葱の雫しづく、縁に風りんのチリリンと鳴る時、芸妓げいこ島田とうだを俯向うつむ  
けに膝に突伏つづぶした。

その時、待合の女房が、襖ふすまごし越しに、長火鉢の処ところで、声を掛けた。

「染ちゃん、お出ばなが。」

俊吉はこれを聞くと、女の肩に掛けていた手が震えた……染ちゃんと云う年紀としではない。  
遊ゆ女めあがりの女をと気がさして、なぜか不思議に、女もともに、侮あなぶり、軽んじからひやか、冷評ひやかされ

たような気がして、悚然として五体を取つて引緊められたまで、極りの悪い思いをしたのであつた。

いわゆる、その（お出ばな）のためであつた、女に血を浴びせるような事の起つたのは。思えば、その女には当夜は云うまでもなく、いつも、いつまでも逢うべきではなかつたのである。

はじめ、無理をして廓くるわを出たため、一度、町の橋は渡つても、潮に落行かねばならない羽目で、千葉へ行つて芸妓げいしゃになつた。

その土地で、ちよつとした呉服屋に思われたが、若い男が田舎氣質かたぎの赫かっと逆上せた深嵌まきりで、家も店も潰つぶした果はてが、女房子を四辻へ打棄うつちやつて、無理算段の足抜きで、女を東京へ連れて遁にげると、旅籠はたごすまい住居の氣を換える見物の一晩。洲崎すざきの廓くるわへ入つた時、ここの大籬おおまがきの女を俺が、と手折たおった枝に根はやを生す、返かえりざき咲さきの色を見せる気にもなつたし、意氣な男で暮したさに、引手茶屋が一軒、不景氣で分散して、売物に出たのがあつたのを、届くだけの借金で、とにかく手附ぐらいな処で、話を着けて引受け稼業をした。

まず引掛ひつけの昼夜帶きせきが一つ鳴つて『しま』つた姿。わざと短い煙管どうこで、真新しい銅壺どうこに並んで、立膝で吹かしながら、雪の素顔で、廓くるわをちらつく影法師を見て思出したか。

勘定をかく、掛すゞりに袖でかくして参らせ候、――

二年ぶり、打絶えた女の音信たよりを受取つた。けれども俊吉は稼業は何でも、主あるものに、あえて返事もしなかつたのである。

『しめ』の形や、雁の翼かりは勿論、前の前の下宿屋あたりの春秋はるあきの空を廻り舞つて、二三度、俊吉の今の住居に届いたけれども、疑うたがいも嫉妬いしつとも無い、かえつて、卑怯ひきょうだ、と自分を罵りながらも逢わずに過した。

臍おぼろおぼろ々の夜も過ぎず、廓は八重桜の盛さかりというのに、女が先へ身を隠した。……櫛卷くしまきが棲白く土手の暗がりを忍んで出たろう。

引手茶屋は、ものの半年とも持堪もちこたえず、――残つた不義理の借金のために、大川を深川から、身を倒さかさまに浅草へ流ながれつ着いた。……手切れてぎれの髪かもじも中に籠こめて、芸妓げいしゃまげに結つた私、千葉の人とは、きれいに分をつけ参らせ候そろ。

そうした手紙を、やがて俊吉が受取つたのは、五重の塔の時鳥ほととぎす。奥山の青葉頃。……

：

雪の森、雪の塀、俊吉は辻へ來た。

## 五

八月の末だつた、その日、俊吉は一人、向島の百花園に行つた。帰途、三一園のあたりから土手へ颶と雲が懸つて、大川が白くなつたので、仲見世前まで腕車で来て、あれから電車に乘ろうとしたが、いつもの雑沓。急な雨の混雜はまた夥しい。江戸中の人は箱詰にする体裁。不見識なのはもちに捏ぢられた蠅の形で、窓にも踏台にも、べたべたと手足をあがいて附着く。

電車は見る見る中に黒く幅つたくなつて、三台五台、群衆を押離すがごとく雨に洗い落した。そうに軋んで出る。それをも厭わない浅間しさで、児を抱いた洋服がやつと手を縋つて乗掛けた処を、鉄棒で払わぬばかり車掌の手で突離された。よろめくと帽子が飛んで、小児がぎやつと悲鳴を揚げた。

この発奮に、

「乗るものが。」

濡れるなら濡れろ、で、奮然として駆出したが。

仲見世から本堂までは、もう人気もなく、雨は勝手に降つて音も寂寥としたその中を、

一思いに仁王門も抜けて、御堂の石畳を右へついて廻廊の欄干を三階のように見ながら、廊の頬母しさを親船の舳のように仰いで、沫を避けつつ、吻と息。濡れた帽子を階段擬宝珠に預けて、瀬多の橋に夕暮れた一人旅という姿で、茫然としつしばらくなむ。……

風が出て、雨は冷々として小留むらしい。

雪で、不気味さに、まくつていた袖をおろして、しつとりとある襟を搔合す。この陽気なればこそ、蒸暑ければ必定雷鳴が加わるのであつた。

早や暮れかかつて、ちらちらと点れる、灯の数ほど、ばらばら誰彼の通り。

話声がふわふわと浮いて、大屋根から出た蝙蝠のように目前に幾つもちらつくと、柳も見えて、樹立も見えて、濃く淡く墨になり行く。

朝から内を出て、随分遠路を掛けた男は、不思議に遙々と旅をして、広野の堂に、一人雨宿りをしたような気がして、里懐かしさ、人恋しさに堪えやらぬ。

「訪ねてみようか、この近処だ。」

既に、駆込んで、一呼吸吐いた頃から、降籠められた出前の雨の心細さに、親類か、友達か、浅草辺に番傘一本、と思うと共に、ついそこに、目の前に、路地の出窓から、果敢にかけこひといきつかりこでさきはか

ない顔を出して格子に縋つて、此方を差覗くような気がして、筋骨も、ひしひしとしめつけられるばかり身に染みた、女の事が……こうした人懐しさにいや増る。……ここで逢うのは、旅路遙な他國の廓で、夜更けて寝乱れた従妹にめぐり合つて、すがり寄る、手の緋縮纏は心の通う同じ骨肉の血であるがごとく胸をそそられたのである。

抱えられた家も、勤めの名も、手紙のたよりに聞いて忘れぬ。

「可し。」

肩を揺つて、一ツ、胸で意氣込んで、帽子を俯向<sup>うつむ</sup>けにして、御堂の廊<sup>ひさし</sup>を出た。……

軽い雨で、もう面<sup>おもて</sup>を打つほどではないが、引緊めた袂重たく、しょんぼりとして、九<sup>こ</sup>折なる抜裏、横町。谷のドン底の溝<sup>どぶ</sup>づたい、次第に暗き奥山路<sup>おくやまみち</sup>。

## 六

時々足許から、はつと鳥の立つ女の影。……けたたましく、可哀<sup>あわれ</sup>に、心悲しい、鳶<sup>とび</sup>とらるると聞く果敢<sup>はか</sup>ない蝉の声に、俊吉は肝を冷しつつ、※々 《ぱつぱつ》と面<sup>おもて</sup>を照らす狐火<sup>きつねび</sup>の御神燈に、幾たびか驚いて目を塞<sup>ふさ</sup>いだが、路も坂に沈むばかり。いよいよ谷深く、

水が漆を流した溝端に、茨のごとき格子前、消えずに目に着く狐火が一つ、ぼんやりとして（薦屋）とある。

「これだ。」

そつ 密と、下へ屈むようにしてその御神燈をみまわすと、他に小草の影は無い、染次、と記したひと葉のみ。で、それさえ、もと居たらしい芸妓の上へ貼紙をしたのに記してあつた。看板を書かえる隙もない、まだ出たてだという、新しさより、一人旅の木賃宿に、かよわい女が紙衾のかみぶさまの可哀さが見えた。

とばかりで、俊吉は黙つて通過ぎた。

が、筋向うの格子戸の鼠鳴に、ハツと、むささびが吠えたほど驚いて引返して、薦屋の門を逆に戻る。

うつむ 俯向いて（たたず）いた。が、前刻の雨が降込んで閉めたのか、框の障子は引いてある。……そこに切張の紙に目隠しされて、あの女が染次か、と思う、胸がドキドキして、また行過ぎる。

トあの鼠鳴がこつちを見た。狐のようで鼻が白い。

俊吉は取つて返した。また戻つて、同じことを四五度した。

いいもの望みで、木賃を恥じた外聞ではない。……巡礼の笈に国々の名所古跡の入ったほど、いろいろの影について廻った三年ぶりの馴染みに逢う、今、現在、ここで逢うのに無事では済むまい、——お互に降つて湧くような事があろう、と取越苦勞の胸騒がしたのであつた。

「御免。」

と思切つて声を掛けた時、俊吉の手は格子を压えて、そして片足遁構えで立っていた。  
「今晚は。」

「はい、今晚は。」

と平べつたい、が切口上で、障子を半分開けたのを、孤家の婆々かと思うと、たぼの張つた、脊の低い、年紀には似ないで、頸を塗つた、浴衣の模様も大年増。これが女房とすぐに知れた。

俊吉は、ト御神燈の灯を避けて、路地の暗い方へ衝と身を引く。  
白粉のその頸を、ぬいと出額の下の、小慧しげに、世智辛く光る金壺眼で、じろりと見越して、

「今晚は。誰方様で?」

「お宅に染次つてのは居りますか。」

「はい居りますでござりますが。」

と立塞<sup>たちふさ</sup>がるように、しかも、遁<sup>にが</sup>すまいとするように、框<sup>かまち</sup>一杯にはだかるのである。

「ちよつとお呼び下さいませんか。」

ああ、来なければ可かつた、奥も無<sup>よ</sup>さそうなのに、声を聞いて出て来ないくらいなら、  
とがつくり泥<sup>ぬかるみ</sup>濘<sup>ねかるみ</sup>へ落ちた氣がする。

「唯<sup>ただいま</sup>今<sup>今</sup>お湯へ参つてますがね、……まあ、貴方<sup>あなた</sup>。」と金壺眼はいよいよ光つた。

「それじやまた来ましよう。」

「まあ、貴方。」

風体を見定めたか、慌<sup>あわただ</sup>しく土間へ片足を下ろして、

「直<sup>じ</sup>きに帰りますから、まあ、お上んなさいまし。」

「いや、途中で困つたから傘を借りたいと思つたんですが、もう雨も上りましたよ。」

「あら、貴方、串<sup>じょうだん</sup>戯<sup>戯</sup>じやありません。私が染ちゃんに叱られますわ、お帰し申すもんですかよ。」

七

「相合傘でいらつしやいまし、染ちゃん、嬉しいでしよう、えへへへへ、貴方、御機嫌よ  
う。」

と送出した。……

からかさ  
傘は、染次が榎<sup>つま</sup>を取つてさしかける。

「いや  
可厭な媽々だな。」

「まだ聞えますよ。」

と下へ、袂<sup>たもと</sup>の先をそつと引く。

それなり四五間、黙つて小雨の路地を歩<sup>ある</sup>行く、……俊吉は少しづつ、……やがて傘の下を離れて出た。

「濡れますよ、貴方。」

男は默然<sup>だんまり</sup>の腕組<sup>ゆ</sup>して行く。

「ちよつと、濡れるわ、お前さん。」

やつぱり暗い方を、男は、ひそひそ。

「濡れると云うのに、」

手は届く、羽織の袖をぐつと引いて突附けて、傘を傾けて、「邪慳だねえ。」

「泣いてるのか、何だな、<sup>おおき</sup>大な姉さんが。」

「……お前さん、可懐しい、恋しいに、年齢に加減はありませんわね。」

「何しろ、お前、……こんな路地端に立つてちや、しようがない。」

「ああ、早く行きましょう。」

と目を蔽<sup>お</sup>うていた袖口をはらりと落すと、瓦斯<sup>ガス</sup>の遠<sup>とお</sup>灯<sup>あかり</sup>にちらりと翻<sup>かえ</sup>る。

「少づくりで極<sup>きま</sup>りが悪いわね。」

と棲<sup>さば</sup>を捌<sup>さば</sup>いて取直して、

「極<sup>きまり</sup>が悪いと云えば、私は今、毛筋立<sup>つっぱ</sup>を突張らして、薄化粧<sup>い</sup>は可いけれども、のぼせて湯から帰つて来ると、染ちゃんお客様<sup>おかみ</sup>が、ツて女房さんが言つたでしよう。

内へ来るような馴染<sup>なじみ</sup>はなし、どこの素見<sup>ひやかし</sup>だろうと思つて、おやそうか何か気の無い返事をして、手拭<sup>てぬぐい</sup>を掛けながら台所口<sup>だいどころぐち</sup>から、ひよいと見ると、まあ、お前さんなんだもの。真赤<sup>まつか</sup>になつたわ。極<sup>きまり</sup>が悪くつて。」

「なぜだい。」

「悟られやしないかと思つてさ。」

「何を?……」

「だつて、何をツて、お前さん、どこか、お茶屋か、待合からかけてくれれば可いじやありませんか、唐突に内へなんぞ来るんだもの。」

「三年越しだよ、手紙一本が当なんだ。大事な落しものを搜すような気がするからね、どこにあるには違ひないが、居るか居ないか、逢えるかどうか分りやしない。おまけに一向土地不案内で、東西分らずだもの。茶屋の広間にたつた一つ膳を控えて、待つていて、そんな妓は居りません。……居ますが遠出だなんぞと来てみたが可い。御存じの融通が利かないんだから、可、ついでにお銚子のおかわりが、と知らない女を呼ぶわけにや行かずさ、瀬ぶみをするつもりで、行つたんだ。

もつともね、居ると分つたら、門口から引返して、どこかで呼ぶんだつけ。嬢々が追掛るじゃないか。仕方なし奥へ入つたんだ。一間しかありやしない。すぐの長火鉢の前に嬢々は控えた、顔の遣場<sup>やりば</sup>もなしに、しよびたれておりましたよ、はあ。

光つた旦那じやなし、飛んだお前の外聞だつけね、済まなかつたよ。」

「あれ、お前さんも性悪しょうわるをすると見えて、ひがむ事を覚えたね。誰が外聞だと申しました、俊さん、」

取つた袂に力が入つて、

「女房おかみさんに、悟られると、……だと悟られると、これから逢うのに、一々、勘定が要る  
じやありませんか。おまいりだわ、お稽古だわッて内証ないしよで逢うのに出憎いわ。

はじめの事は知つてるから私の年が年ですからね。主人の方じや目くじらを立てていま  
すもの、——顔を見られてしまつてさ……しょびたれていましたよ、はあ。——お前の外  
聞だつけね、済まなかつた。……誰が教えたの。」

とフフンと笑つて、

「素人だね。」

## 八

「……わざと口数も利かないで、一生懸命に我慢をしていた、御免なさいよ。」  
声がまた悄しおれて沈んで、

「何にも言わないで、いきなり嘔りつきたかつたんだけれど、澄し返つて、悠々と髪を撫でつけたりなんかして。」

「行場がないから、熟々<sup>しみじみ</sup>拝見をしましたよ、……眩しい事でございました。」

「雪のようでしよう、ちよつと片膝立てた処なんざ、千年ものだわね、……染ちゃん大分御念入だねなんて、いつもはもつと塗れ、もつと髪<sup>たほ</sup>を出せと云う女房<sup>おかみ</sup>さんが云うんだもの。どう思つたか知らなけれど、大抵こんがらかつたろうと私は思うの。

そりや成りたけ、よくは見せたいが弱身だつて、その人の見る前じやあねえ、……察して頂戴。私はお前さんに恥かしかつたわ、お乳なんか。」

と緊められるように胸を<sup>おさ</sup>えた、肩が細りとして重そうなので、俊吉が傘を取る、と忘れたように黙つて放す。

「いいえ、結構でございました、湯あがりの水髪で、薄化粧を<sup>さつ</sup>と直したのに、別してはまた緋縮纏<sup>ひぢりめん</sup>のお襦袢<sup>じゆばん</sup>を召した処と来た日にや。」

「あれさ、止して頂戴……火鉢の処は横町から見通しでしよう、脱ぐにも着るにも、あの、鏡台の前しかないんだもの。……だから、お前さんに壁の方を向いて下さいと云つたじやありませんか。」

「だつて、以前は着ものを着たより、その方が多かつた人じやないか、私はちつとも恐れ  
やしないよ。」

「ねえ……ほほほ。……」

笑つてちょっと 口籠くちごもつて、

「ですがね、こうなると、自分ながら気が変つて、お前さんの前だと花嫁も同じことよ。  
……何でしたつけね、そら、川柳とかに、下に居て嫁は着てからすつと立ち……」

「お前は学者だよ。」

「似てさ、お前さんに。」

「大きにお世話だ、学者に帯を〆しめさせる奴があるもんか、おい、……まだ一人じ  
や結べないかい。」

「人、……芸者の方が、ああするんだわ。」

「勝手にしやがれ。」

「あれ。」

「ちつとやらあねえ。」

「溝どぶへ落つこちるわねえ。」

「えへん！」

と怒鳴つて擦違いに人が通つた。早や、旧來もと了瓦斯ガスに頬冠ほおかむりした薄青い肩の処が。

「どこだ。」

「一直いちなおの堀の処だわ。」

直きその近所であつた。

「座敷はこれだけかね。」

と俊吉は小さな声で。

「もう、一間ありますよ。」

と染次が云う。……通された八畳は、燈あかりも明あかるし、ぱつとして畠も青い。床には花も活いかつて。山家を出たような俊吉の目には、博覽会の茶座敷を見るがごとく感じられた。が、入る時見た、襖ふすま一重ひとえが直ぐ上あがりかまち框兼帶の茶の室で、そこに、鬚まげに結いつた婆婆氣しゃばきなのが、と膝を占めて構えていたから。

話に雀ほどの声も出せない。

で、もう一間とみまわすと、小庭の縁が折曲りに突当りが板戸になる。……そこが細目にあいた中に、月影かと見えたのは、廊に釣つた箱燈寵はこどうろうの薄明りで、植込を濃く、むこうへ

ぽかして薄りと青い蚊帳。

ト顔を見合せた。

急に二人は更つたのである。

男が真中の卓子台に、肱を支いて、

「その後は。どうしたい。」

「お話にならないの。」

と自棄に、おくれ毛を搔つたが、……心配はさせない、と云う姉のような呑込んだ優い

微笑み。

## 九

「失礼な、どうも奥様をお呼立て申しまして済みません。でも、お差向いの処へ、他人が出ましてはかえつてお妨げ、と存じまして、ねえ、旦那。」

と襖越に待合の女房が云つた。

びたりと後手にその後を閉めたあとを、もの言わぬ応答にちよつと振返つて見て、

そのまま片手に茶道具を盆ごと据えて立直つて、すらりと蹴出しの紅くれないに、明石の裾ひを曳いた姿は、しとしと雨垂れが、子持縞こもぢまの浅黄に通つて、露に活いきたよう美しかつた。

「いや。」

とただ間拍子もなく、女房の言いぐさに返事をする、俊吉の膝へ、衝と膝をのつかかるようにして盆ごと茶碗を出したのである。

茶を充满の吸子が一所に乗つていた。

これは卓子台ちやぶだいに載せると可かつた。でなくば、もう少し間を措いて居れば仔細なかつた。もとから芸妓げいしゃだと離れたろう。前の遊女は、身を寄せるのに馴れた。しかも披露目ひろめ日の冷汗を恥じて、俊吉の膝に俯伏うつぶした処を、（出ばな。）と呼ばれて立つたのである。

…

お染はもとの座へそうして近々と来て盆ごと出しながら、も一度襖越しに見返つた。名ある女を、こうはいかに、あしらうまい、——奥様と云つたな——膝に縋つた透見すきみをしたか、恥と怨うらみを籠めた瞳は、遊里さとの二十はたちの張はりが籠つて、熟と襖に注がれた。

ト見つつ夢のようにうつかりして、なみなみと茶をくんだ朝顔形なりの茶碗に俊吉が手を掛ける、とコトリと響いたのが胸に通つて、女は盆ごと男が受取つたと思つたらしい。ドン

と落ちると、盆は、ハツと持直そつとする手に引かれて、俊吉の分も浚つた茶碗が対。吸きびしょ子も共に発奮を打つてお染は肩から胸、両膝かけて、ざつと、ありたけの茶を浴びたのである。

むらむらと立つ白い湯気が、崩るる袴の紅の陽炎のごとく包んで伏せた。  
頸を細く、面を背けて、島田を斜に、

「あつ。」と云う。

「火傷はしないか。」と倒れようとするその肩を抱いた。

「どうなさいました。」と女房飛込み、この体を一目見るや、

「雑巾々々。」と宙に躍つて、蹴返す裳に刎ねた脚は、ここに魅した魔の使が、鴨居を抜けて出るよう見えた。

女の袖つけから膝へ湛つて、落葉が埋んだような茶殻を掬つて、仰向けた盆の上へ、俊吉がその手の雲を切つた時。

「可ござんすよ、可ござんすよ、そうしてお置きなさいまし、今私が、」

と言ひながら白に浅黄を縁とりの手巾で、脇を压えると、脇。膝をズぶズぶと压えると、膝を、濡れたのが襦袢を透して、明石の縞に浸んでは、手巾にひたひたと桃色の雲を

染めた。――

「ええ、私あの時の事を思出したの、短刀で、ここを切られた時、……  
と、一年おいて如月きさつきの雪の夜更けにお染は、俊吉の矢来の奥の二階の置炬燵おきごたつに弱々もたと凭もたれて語つた。

さてその夜は、取つて返して、両手に雑巾を持って、待合の女房あらわが顕あらわれたのに、染次は  
惜れながら、羅の袖を開いて見せて、

「汚点しみになりましようねえ。」

「まあ、ねえ、どうも。」

と伸上つたり、縮んだり。

「何しろ、脱がなくツちやお前さん、直き乾くだけは乾きますからね……あちらへ来て。  
さあ――旦那、奥様のお膚はだを見ますよ、済みませんけれど、貴下あなたが邪慳じやけんだから仕方が無  
い。……」

俊吉は黙つて横を向いた。

「浴衣と、さあ、お前さん、」

と引立てるようになされて、染次は悄々と次に出た。……組合の気脉が通つて、待合の女房も、抱主が一張羅を着飾らせた、損を知つて、そんなに手荒にするのであるう、ああ。

## 十

「大丈夫よ……大丈夫よ。」

「飛んだ、飛んだ事を……お前、主人にどうするえ。」

「まさか、取つて食おうともしませんから、そんな事より。」

と莞爾した、顔は蒼白かつたが、しかしそれは蚊帳の萌黄もえぎが映つたのであった。

帰る時は、効々しくざつと干したのを端折つて着ていて、男に傘を持たせておいて、

止せと云うに、小雨の中をちよこちよこ走りに自分で俾くるまを雇つて乗せた。

蛇目傘じやのめを泥に引傾げ、楫棒かじぼうを压えぬばかり、泥除よけに縋つて小造すがな女あおむが仰向あおむけに

母衣ほろを覗く顔の色白々と、

「お近い内に。」

「…………」

「きっと？」

「むむ。」

「きっとですよ。」

俊吉は黙つて領うなずいた。

暗くて見えなかつたろう。

「きっとよ。」

「分つたよ。」

「可よござんすか。」

「煩うるさい。」と心にもなく、車夫の手前、宵から心遣いに疲れ果てて、ぐつたりして、夏の雨も寒いまでに身体もぞくぞくする痲痺からだかんしゃく、まぎれに云つたのを、気にも掛けず、ほつと安心したように立直つたと思うと、

「車夫さん、はい——あの車賃は払いましたよ。」

「有るよ。」

「威張つてさ、それから少しですが御祝儀。氣をつけて上げて下さいよ、よくねえ、氣をつけて、可かござんすか。」

「大丈夫でござりますよ、姉さん。」と楫かじを取つた片手に祝儀を頂きながら。

「でも遠いんですもの、道は悪し、それに暗いでしよう。」

「承うけあい合あいましたよ。」

「それじや、お近いうち。」

影を引ひき切るよう<sup>ひつき</sup>に衝つと過ぎる車のうしろを、トンと敲たたいたと思うと夜の潮に引残されて染次は残つてしまんぼりと立つ。

車が路を離れた時、母衣の中とて人目も恥じず、俊吉は、ツト両りょう掌てで面おもてを蔽おおうて、はらはらと涙を落した。……

「でも、遠いんですもの、道は悪し、それに暗いでしよう。」

行方も知らず、分れるよう思つたのであつた。

そのまま等なおざり閑かねにすべき義理ではないのに、主人にも、女にも、あの羅うすものぐなの償めがをする用意なしには、忍んでも逢つてはならないと思うのに、あせつてもがいても、半月や一月でその金子は出来なかつた。

のみならず、追縋おいすがつて染次が呼出しの手紙の端に、——明石のしみは、しみ抜屋にても引受け申さず、この上は、くくみ洗いをして、人肌にて暖め乾かし候よりせむ方なしとて、毎日少しずつふくみ洗いいたし候ては、おかみさんと私とにて毎夜添臥そいぶし※。夜ごとにかわる何とかより針の筵むしろに候えども、お前さまにお目もうじのなごりと思い候えば、それさえうつつ心に嬉しく懐しく存じ※……。

ふくみ洗いで毎晩抱く、あの明石のしみを。行かれるものか、素手で、どうして。  
秋の半ばに、住かえた、と云つて、ただそれだけ、上州伊香保から音信たよりがあつた。  
やがてくわしく、と云うのが、そのままになつた——今夜なのである。

俊吉は抄取らぬ雪を踏しめ踏しめ、傘を見送られた時を思出すと、傘も忘れて、降る雪に、頭つむりを打たせて俯向うつむきながら、義理と不義理と、人目と世間と、言訳なきと可懐しさ、とそこに、見える女の姿に、心は暗やみの目はぼうとして白い雪、睫毛まつげに解けるか零しづくが落ちた。

## 十一

「……そういったわけだもの、ね、……そんなに怨むもんじやない。」

襦袢一重の女の背へ、自分が脱いだ紺の綿入羽織を着せて、その肩に手を置きながら、俊吉は向い合いもせず、置炬燵の同じ隅に凭れていた。

内へ帰ると、一つ躊躇ながら、框へ上つて、奥に仏壇のある、襖を開けて、そこに行火をして、もう、すやすやと寝た、撫つけの可愛らしい白髪と、裾に解きもののある、女中の夜延とを見て、密とまた閉めて、ずかずかと階子を上ると、障子が閉つて、張合の無さは、燈にその人の影が見えない。

で、嘘だと思つた。

ここで、トボンと夢が覚めるのであろう、と途中の雪の幻さえ、一斉に消えるような、げつそり気の抜けた思いで、思切つて障子を開けると、更紗を掛けた置炬燵の、しかも机に遠い、縁に向いた暗い中から、と黒髪が揺めいて、やつれたが、白い顔。するりと紺の肩を抽いたのは夢ではなかつたのである。

「どうした。」

と顔を見た。

「こんな、うまい装<sup>なり</sup>をして、驚いたでしょう。」  
と莞爾<sup>につこり</sup>する。

「驚いた。」

とほつと呼吸して、どつか、と俊吉は、はじめて瀬戸ものの火鉢の縁に坐つたのである。

「ああ、座蒲団はこつち。」

と云う、背中に当てて寝ていたのを、ずらして取ろうとしたのを見て、  
「敷いておいで、そつちへ行こう、半分ずつ、」

と俊吉はじめて笑つた。……

お染は、上野の停車場から。——深川の親の内へも行かずに——じかづけに車でここへ  
来たのだと云う。……神楽坂は引上げたが、見る間に深くなる雪に、もう郵便局の急な勾  
配で呼吸ついて、我慢にも動いてくれない。仕方なしに、あれから路の無い雪を分けて、  
矢来の中をそつちこつち、窓明りさえ見れば気がね<sup>きがね</sup>兼<sup>きみ</sup>をしいしい、一時ばかり尋ね廻つた。  
持つてた洋傘<sup>こうもり</sup>も雪に折れたから途中で落したと云う。それは洲崎を出る時に買ったま  
の。憑きもの のようだ、と寂しく笑つた。

俊吉は、正<sup>まんじ</sup>の中を雪に漾う、黒髪のみだれを思つた。

女中が、何よりか、と火を入れて炬燵に導いてから、出先へ迎いに出たあとで、冷いと  
だけ思つた袖も裙も衣類<sup>きもの</sup><sub>すそ</sub>が濡れたから不気味で脱いだ、そして蒲団の下へ掛けたと云う。

「何より不気味だね、衣類きものの濡れるのは。……私、聞いても悚然ぞうぜんする。……済まなかつた。  
お染さん。」

女はそこで怨んだ。

帰る途みちすがらも、眞実の涙を流した言訳を聞いて、暖い炬燵の膚はだのぬくもりに、とけた雪は、ひと斉しく女の瞳に宿つた。その時のお染の目は、おおきみはぐられて美しかつた。

「女中さんは。」

「女中か、私はね、雪でひとりでに涙が出ると、茫ぼつと何だか赤いじゃないか。引擦ひつこすつてみるとお前、つい先へ提ちようちゃん灯が一つ行くんだ。やつと、はじめて雪の上に、こぼこぼ下駄のあとの印つけいたのが見えたつけ。風は出たし……歩行あるき悩あらうんだろう。先へ出た女中がまだそこを、うしろの人足も聞きつけないで、ふらふらして歩行あるいているんだ。追着おつづいてね、使つかいがこの使だ、手を曳ひくよにして力をつけて、とぼとぼ遣りながら炬燵の事も聞いたよ。」

しんせつついでだ、酒屋へ寄つてくれ、と云うと、二つ返事で快く受けたから、団に乗つてもう一つ狐きつねそば蕪あつら麦むぎを誂えた。

「上州のお客にはちょうど可いわね。」

「嫌味を云うなよ。……でも、お前は先から麺類を断つてゐる事を知つてゐるから、てんのぬきを逃れたぜ。」

「まあ、嬉しい。」

と膝で確りと手を取つて、

「じゃ、あの、この炬燵の上へ盆を乗せて、お銚子をつけて、お前さん、あい、お酌つて、それから私も飲んで。」

と熟じつと顔を見つつ、

「頼が叶つたわ、私。……一生に一度、お前さん、とそうして、お酒が飲みたかつた。ああ、嬉しい。余り嬉しさに、わなわな震えて、野暮なお酌をすると口惜い。稽古をするわ、私。……ちよつとその小さな掛けはないけ掛花活を取つて頂戴。」

「何にする。」

「お銚子を持つ稽古するの。」

「狂人染みた、何だな、お前。」

「よう、後生だから、一度だつて私のいいなり次第になつた事はないぢやありませんか。」

「はいはい、今夜の処は御意次第。」

そこが地袋で、手が直ぐに、水仙が少しすがれて、摺<sup>すず</sup>つて、危く落ちそうに縋<sup>すが</sup>つたのを、  
密<sup>そつ</sup>と取ると、羽織の肩を媚<sup>なまめ</sup>かしく脱掛けながら、受取つたと思うと留める間もなく、ぐ、  
ぐ、と咽喉<sup>のど</sup>を通して一息に仰いで呑んだ。

「まあ、お染。」

「だつて、ここが苦しいんですもの、」  
と白い指で、わなわなど胸を擦<sup>さす</sup>つた。

「ああ、旨<sup>おいし</sup>かつた。さあ、お酌。いいえ、毒なものは上げはしません、ちよつと、ただ口  
をつけて頂戴。花にでも。」

「ままよ。」……構わず呑もうとすると雲<sup>しづく</sup>も無かつた。

花を唇につけた時である。

「お酒が来たら、何にも思わないで、嬉しく飲みたい。……私、ほんとに伊香保では、酷<sup>ひど</sup>  
い、情ない目に逢つたの。

お前さんに逢つて、皆忘れたいと思うんだから、聞いて頂戴。……伊香保でね——すぐ  
に一人旦那が出来たの。土地の請負師<sup>うけおいし</sup>だつて云うのよ、頼みもしないのに無理に引かし  
てさ、石段の下に景ぶつを出す、射<sup>しゃ</sup>的<sup>てき</sup>の店を拵えてさ、そこに円<sup>まる</sup>鬚<sup>まげ</sup>が居たんですよ。

この寒いのに、单衣一つでぶるぶる震えて、あの……千葉の。先の呉服屋が来たんでしょ。可哀相でね、お金子を遣つて旅籠屋を世話するとね、逗留をして帰らないから、旦那は不斷女にかけると狂人のような嫉妬やきだし、相場師と云うのが博徒でね、命知らずの破落戸の子分は多し、知れると面倒だから、次の宿まで、おいでなさいつて因果を含めて、……その時止せば可かつたのに、湯に入ったのが悪かつた。……帶を解いたのを見られたでしよう。

——染や、今日はいい天氣だ、裏の山から隅田川が幽に見えるのが、雪晴れの名所なんだ。一所に見ないかつて誘うんですもの。

余り可懐しさに、うつかり雪路を上つたわ。峠の原で、たぶさを取つて引倒して、覚えがあろうと、ずるずると引摺られて、積つた雪が摺る枝の、さいかちに手足が裂けて、あの、実の真赤なのを見た時は、針の山に追上げられる雪の峠の亡者か、と思つたんですがね。それから……立樹に結えられて、……

「お染。」

「短刀で、こ、こことここを、あつちこつち、ぎらぎら引かれて身体一面に血が流れた時は、……私、その、たらたら流れて胸から乳から伝うのが、渴きの留るほど嬉しかつた。

莞爾莞爾したわ。何とも言えない可い心持だつたんですよ。お前さんに、お前さんに、  
あの時、——一面に染まつた事を思出して何とも言えない、いい心持だつたの。この襦  
袢です。斬られたのは、ここだの、ここだの、」

と俊吉の瞋る目に、胸を開くと、手巾ハンケチを当てた。見ると、顔の色が真蒼まっさおになると  
もに、垂々ぼたぼたと血に染まるのが、溢あふれて、わななく指を洩もれる。

俊吉は突伏した。

血はまだ溢れる、音なき雪のように、ぼたぼたと鳴つて留やまぬ。  
カーンと仏壇のりんが響いた。

「旦那様、旦那様。」

「あ。」

と顔を上げると、誰も居ない。炬燵の上に水仙が落ちて、花活はないの水が点滴したたる。

俊吉は、駆かけお下りた。

遠慮して段の下に立つた女中が驚きながら、

「あれ、まあ、お跳子がつきましてございますが。」

俊吉は呼吸いきがはずんで、

「せ、せ、折角だつけ、……客は帰つたよ。」

と見ると、仏壇に灯が点いて、老人が殊勝に坐つて、

御法の声。

「……我常住於此 以諸神通力 令顛倒衆生

雖近而不見

衆見我滅度

廣供養舍利 咸皆懷恋慕

而生渴仰心

……

白髮に尊き燈火の星、觀音、そこにおはします。……駈寄つて、はつと肩を抱いた。

「お祖母さん、どうして今頃御経を誦むの。」

慌てた孫に、従容として見向いて、珠数を片手に、

「あのう、今しがた私が夢にの、美しい女の人がござつての、回向を頼むと言わしつた故にの、……悉しい事は明日話そう。南無妙法蓮華經。……廣供養舍利 咸皆懷恋慕

而生渴仰心 衆生既信伏 質直意柔

新聞の電報と、続いて掲げられた上州の記事は、ここには言うまい。俊吉は年紀二十七。

いかほ野やいかほの沼のいかにして

恋しき人をいま一見見む

大正三（一九一四）年一月





## 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

※誤植箇所の確認には底本の親本を用いました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 第二巻 本 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>